

【研究ノート】

高崎における獅子舞の伝承活動の実態

埋蔵文化財担当1 嘱託職員（学芸員）

鈴木 英恵

はじめに

小稿では、高崎地域に広く分布する一人立ち3匹獅子舞を取り上げる。その一例として、高崎市倉渕町川浦に伝わる川浦諏訪神社の獅子舞の伝承状況を述べてみたい。この獅子舞は1997年（平成9）6月11日に高崎市指定無形民俗文化財に指定された。この獅子舞の現状について、筆者は2024年（令和6）4月に民俗調査を行った。以下では、獅子舞の練習方法、そして川浦諏訪神社春季例大祭の準備に焦点を当て、その状況を描き出したい。

1. 民俗学の面白さ

まず、筆者の専攻である民俗学を説明する。民俗学は、読み方が同じこともあり度々「民族学」と混同される。両者はいずれも人を対象としているがその手法は大きく異なる。

前者の民俗学を一言でいえば、親から子へ、子から孫へと、過去から現在にわたって毎年のように繰り返し行われてきた生活文化に着目し、ある地方や時代の民間伝承（年中行事、人生儀礼、家単位での行事、一定の地域単位での祭礼行事、食文化、民俗芸能など）を通し、そこに展開する生活様式の変遷を明らかにしようとする学問である。

一方、民族学はエスノロジー（Ethnology）の訳で、諸民族の文化や言語、宗教を観点に比較調査し、人類文化の発生や伝播を追究する学問である。

民俗学の創始者とされる柳田國男（1875—1962）は、1935年（昭和10）に東京都九段下の日本青年会館で日本民俗学講習会を開催した。7月31日から一週間、民俗学の全体像を学ぶ14の講義が行われ、全国各地から126名が参加した。この時、柳田は「採集期と採集技能」、折口信夫は「地方に居て試みた民俗研究の方法」を

講義した。講義終了一カ月後の同年9月には全国的な組織である民間伝承の会が設立し、月刊『民間伝承』が刊行されるに至った（註1）。

以上のことから指摘できることは、日本民俗学が非常に若い学問で、その創設から百年も経過していないことである。このような理由もあって、民俗学と同音の民族学が混同される事態が起こると考えられる。民俗学は文献、調査報告書等から学ぶことも必要であるが、もっとも重要なのはフィールドワークである。調査地の人びとと円滑なコミュニケーションを取りながら聞き書を通じ、民間伝承を記録して地域独自の歴史と民俗を再構成していく。そこで必要となるのは第三者の視点で客観的に民俗を観察すること、現地の人びとの言葉や行動を記録すること、形として残らない生活そのものを文字や写真のほか、映像機器や音声機器等を用いて残すことである。

2. 高崎地域の獅子舞とその実態

（1）獅子舞の伝承とその形態

獅子はライオンに似た想像上の動物である。獅子舞とは獅子、猪、鹿などをかたどった頭をかぶって舞う神事芸能で、奄美北部・南九州などを除いた全国各地の広範にわたって伝承している（註2）。

獅子舞の系統について、本田安次は一人で演じる「一人立ち獅子舞」と二人以上の複数で演じる「二人立ち獅子舞」の二系統に分類している。まず、一人立ち獅子舞は一人が獅子頭をかぶり腰につけた太鼓を打ち鳴らし、3匹以上で同時に舞うものである。華やかな衣装や花笠を伴うことから、中世に成立した風流系獅子舞とされる。次に、二人立ち獅子舞は、一人が獅子頭をかぶって獅子の前脚になる。他の一人あるいはそれ以上の人数で後ろ脚と獅子の胴体を務める。この形態は大陸から渡来した獅子とされ、仮面劇で雅楽に合わせて舞うことから、伎楽・舞楽系とされる（註3）。

（2）高崎地域の獅子舞

高崎市内の各神社では、春と秋の例大祭に獅

子舞奉納が行われるが、毎年桜が満開になるころ、獅子舞の賑やかな笛と太鼓のお囃子が響き渡る。群馬県内の桜の開花時期は北部と南部で一か月ほど差があるが、県北部に位置する利根郡みなかみ町、同郡川場村、吾妻郡嬭恋村鎌原・同郡嬭恋村大前などは5月上旬である。南西部の高崎市、前橋市、藤岡市では、おおよそ3月中旬から4月中旬にかけて満開を迎える。神社祭礼は農作物の生長（種蒔きから収穫を終えるまで）にあわせて展開されるが、このときに獅子舞奉納が行われる。春季例大祭では、地域の人びとが五穀豊穡を願い獅子舞や神楽の神事芸能を奉納、そして秋季例大祭では米や野菜の豊作を祝って神に感謝する。

ここで、過去の高崎市内における獅子舞伝承を確認したい。新井南花が第二次世界大戦後から1955年（昭和30）までの間に調査した記録によると、旧市内の羅漢町・並榎町、片岡地区の石原町清水・上乘附・寺尾町寺尾、佐野地区の上中居下打出・和田多中、塚沢地区の貝沢町東貝沢・貝沢町西貝沢・上飯塚・下飯塚、六郷地区の下小塙、八幡地区の剣崎・下大島、新高尾地区の中尾天神・上新保・新保田中、中川地区の大八木町・小八木町、計19で、このほかに塚沢地区貝沢町西貝沢には獅子神楽の報告がある（註4）。

その後、群馬県教育文化事業団が県内の各獅子舞の伝承状況について、各獅子舞団体の保存会名・祭の行事名称・公開期日・公開場所・概要をまとめ、その成果を2015年（平成27）に出した。同書から高崎市の獅子舞をあげると中断中を含めて計33である（註5）。平成の大合併で2006年（平成18）に旧群馬郡倉沢村・箕郷町・群馬町・榛名町、多野郡新町、そして2009年（平成21）に多野郡吉井町が高崎市に編入したことで、元々多かった伝承数も増加した。

3. 川浦諏訪神社の獅子舞と歴史

(1) 調査地概要と川浦諏訪神社

現在、高崎市倉沢町に伝わる1人立ち3匹獅子舞の伝承地は、2か所ある。1つは高崎市倉沢町川浦の川浦諏訪神社の獅子舞で、もう1つは

同市倉沢町水沼の水沼古布神社の獅子舞である。双方とも高崎市指定無形民俗文化財である。高崎市倉沢町は高崎市の最西端に位置する。北は吾妻郡東吾妻町、西は長野県北佐久郡軽井沢町、東は榛名山に接する中山間地域で、2006年（平成18）1月に旧群馬郡倉沢村が高崎市へ編入され、高崎市倉沢町が発足した。2014年（平成26）4月に道の駅くらぶち小栗の里が開業し、新鮮な野菜が店頭に並ぶ。また切り花や地元工芸家による焼き物等も販売される。倉沢町では、毎年道祖神めぐりのイベントを中学生の解説で行っており好評を博している。

それでは、高崎市倉沢町川浦に伝わる川浦諏訪神社とその獅子舞についてみて行きたい。川浦諏訪神社は大字川浦字堀ノ沢に位置し、その由来を「本社縁起」で確認したい。

昔元和二年大飢饉ノ時多クノ猪鹿ヲ殺シ
村内飢ヲ免レシニヨリテ諏訪大明神ハ古
伊吹ノ獄獵ノ祖神ナレバトテ信濃国小
郡上田領塩田庄下郷生嶋足嶋神社諏訪
両神社大明神代参ヲ以テ仮石宮ヲ建テ
勸請ス後年神位ヲ贈位シ村内鎮守ト
尊崇シ奉リ神徳盛ニ氏子繁栄ナリト
伝聞申候（註6）

川浦諏訪神社の創建は1616年（元和2）で、大飢饉の際に信濃国小郡郡上田領塩田庄下郷の生嶋足嶋神社、諏訪両神社大明神の代参によって仮石宮を建てて勸請し、後年に川浦村の鎮守となった。明治後期の祭礼については、1912年（明治45）に編纂された『烏沢村郷土誌』が詳しい。この当時の記録が『倉沢村誌』（1975 倉沢村誌編集委員会）にも集録される。それを引用すると以下のとおりである。

諏訪神社（郷社） 大字川浦村字堀ノ沢ニ
在リ建御南方命ヲ祭ル本殿拜殿ノ二字ア
リ、万延元年の建立ニシテ結構壯麗近郷ニ
其ノ比ヲ見ズ、祭日ハ九月十五日ニシテ榛
名神社宮司式典ヲ管掌シ氏子総代之ニ列
ス、古ハ三月中若シクハ下ノ酉ノ日、九月
九日ノ両日ニシテ別当宮下治平氏之レヲ

司レリ、現今ノ祭礼ハ甚ダ寂寞ノ感アレド
モ旧時ハ頗ル盛大ニシテ、角力、獅子舞、
山車、笠鉦等ノ催アリ、夜ハ戸毎ニ提灯、
掛行燈ヲ点ジ壯観ヲ極メタリト云フ

(傍線筆者) (註7)

明治45年ごろは祭礼があまり盛大に行われていなかったようだが、獅子舞の他にも角力(相撲)があった。川浦の各家では提灯や掛行燈を灯して祭りを祝った。

現在、明治後期にあった角力や戸毎で飾る提灯や掛行燈の風習は絶えたが、近年まで祭礼日に合わせて川浦地区の入口から川浦諏訪神社へと続く道路沿いに提灯を下げた。2024年(令和6)は川浦諏訪神社境内だけに下げられ、提灯には寄贈した人の名前や商店名、川浦諏訪神社獅子舞などの文字が入っていた。笠鉦は三基あって、その先端に幣束が立てられていた。色鮮やかな笠鉦の上部から白い紙を巻いた多数の竹ひごが垂れ、それに造花が取り付けられている。平成初年までは、祭りの度に神社世話役人と獅子組で紙製の造花を作って竹ひごに取り付けていたが、現在は出来合いの樹脂製の造花となっている。ダシ(山車)は川浦諏訪神社本殿の左右に飾られる長方形型の飾り物である。このダシのなかに、白い紙を巻いた竹ひごに短冊3枚、花紙2枚をつけたカサボコを複数本入っていた。今年度に祭りに参加した戸数分の計45本のカサボコを神社世話役人が作り、祭り終了後に分配された。

(2) 獅子舞を受け継ぐこと

川浦諏訪神社の獅子舞は、一人立ち3匹獅子舞で判官流である。獅子は雄が2頭、雌が1頭、さらにカンカチ、花笠、笛、大胴で構成されている。黒塗りの獅子頭で頭上に角が二本で、口を開くのが判官(雄)である(写真1)。

中獅子(雌)は朱色で角は無く、頭上に黄金の宝珠を持つ(写真2)。

後獅子(雄)は黒塗りの獅子頭で、頭上に二本の角があって口が閉じる(写真3)。



写真1 口が開く判官(雄)

(川浦公民館) 2024年4月20日撮影



写真2 頭上に宝珠を持つ中獅子(雌)

(川浦公民館) 2024年4月20日撮影



写真3 口が閉じた後獅子(雄)

(川浦公民館) 2024年4月20日撮影

これらの獅子頭に共通するのは、祭礼日に数本の鳥の羽根を前頭につけること、紙製のたてがみを後方に垂らすこと、腰に太鼓をつけることである。雄獅子のたてがみは白紙、雌獅子には色紙を用いる。この紙は毎年付け替えるのではなく、取れたときに紙を継ぎ足していく。獅子が激しく舞うとこの紙が落ちるが、これを持っていると病気除けになるとされる。獅子舞の

構成は、3頭の獅子(判官、女獅子、後獅子)、カンカチ、ササラである。カンカチは二本の鉄棒を打ち鳴らし、ササラは竹を削った部分に竹を当てて音を出す。これに笛や大胴(大太鼓)が加わる。

獅子舞に関する古文書はとくに無く、その起源や由来は定かでない。当地の獅子舞は1971年(昭和46)に後継者育成と維持のため、保存会を結成した。それ以前は、群馬郡倉沢村川浦獅子組と呼ばれていた。近年の奉納日は川浦諏訪神社の春季例大祭4月第3日曜日である。高崎伝統民俗芸能祭りや文化祭等に出演している。第二次世界大戦後には、明治神宮や靖国神社に奉納したこともあった。演舞の数え方は庭(あるいは幕)で、各庭には獅子歌がつく。現在の継承者は①「宮巡り」②「神楽」③「天狗獅子」④「浅切」⑤「笹切」⑥「三拍子」⑦「歌切」⑧「雌獅子隠し」ができ、すべて舞うと約4時間にある。令和6年は「お宮めぐり」「神楽」「浅切り」「笹切り」の計4庭が川浦諏訪神社に奉納された。獅子舞の起源は不明であるが、「天狗拍子」の獅子歌に「京から、京からくだりの唐絵のびょうぶ ひとえにさらりとひきまわりまありに ひとえにさらりとひきまわりまありに」(註8)とあり、京都から伝わった獅子舞とも推察できる。

獅子舞の組織をみていきたい。かつては川浦諏訪神社の氏子で、川浦地区の長男だけが獅子舞に入れた。次男、三男は入れなかった。また、獅子舞に入れたのはこの地に生まれ高等小学校を卒業した長男だけとされ、新人をシンコ、親方を指導役、古参役を古老者と呼び、新人には厳しい練習をさせ、ときには蹴とばすことや突き倒すこともあった(註9)。かつて、古老たちは真剣に若者と向き合い、その舞や技術を伝授したのであった。

令和6年時点での獅子舞の舞手は8人ほどである(写真4)。最年長が60代で、主に30代~50代の人で構成される。以前、舞手であった長老が笛や大胴を行う。その後、次世代に引き継ぐと昭和46年に保存会ができると、その制限はなくなり誰でも興味関心があれば入ること

ができた。最近では、親子で獅子舞に入る人もいる。最年少で笛を吹く中学3年生の男子は、父親が獅子の舞手である。またカンカチを務める男性の父親は、かつて獅子を担った。継承者らも世代間交流の大切さを思い、過去に倉沢町の社会福祉協議会を中心に世代間交流事業を続けた。この事業は「獅子舞に遊びにおいて」を合言葉に、小学生を対象に獅子舞の普及活動を行った。中学生は部活動で忙しいため、その対象では無かった。現在、カンカチを務める男性はこの活動に参加し、高校生のときに再度「笛をするか、舞をするか」と考え、継続していくことを決意した。



写真4 川浦諏訪神社の獅子舞
(川浦諏訪神社) 2024年4月21日撮影

4. 川浦諏訪神社の獅子舞の伝承状況

(1) 獅子舞の練習

2020年(令和2)1月に発生した新型コロナウイルスの影響で、3年ほど獅子舞奉納を取りやめたが、獅子舞関係者から「復活させよう」との声もあって、昨年は獅子舞奉納だけを行った。2024年は無事に春季例大祭が復活し、獅子舞奉納も行われた。

今年度の祭礼日は2024年4月21日(日)で、練習は一週間前の4月14日(日)から19日(金)まで、毎日川浦公民館で夜7時から9時まで行われた。この練習に参加するのは獅子組だけで、主に舞と笛の練習であった。誰がどの役付けなのかがわかるように、ホワイトボード

に獅子舞、カンカチ、ササラの各役付け、庭（演目の名称）の横に個人名の磁石を貼りつけていた。練習では、公民館内のテレビに川浦諏訪神社の獅子舞（高崎市伝統民俗芸能伝承ビデオ制作）のDVDを流しながら、舞手が舞の仕草や動作を確認していた。獅子舞、カンカチ、ササラの舞が上達すると、全体的に動きが速くなり、3頭の獅子舞の太鼓の音がバラバラになる。すると、保存会長や親方、指導者から「笛の音をよく聞いて！」「早いはやい！」と注意があって、さらに「笛に合わせてください！」「笛の音に合わせて踊るのが獅子舞」と言い、笛が獅子舞をリードさせると存在と強調する。

笛の練習は個人で行う人が多いが、2月第3週の3日間にわたって集中的に行い、そのときは笛の音色を片仮名書きにした唱歌^{しょうが}を声に出して読む。たとえば、道^{みち}笛^{ふえ}（写真5）をみると笛の音色の「チャウトロリ、リヤウトロリ、リヤー、リヤー」とあり、まず声に出して覚えたいので、次の段階として笛に移る。笛の練習で伝承者が一同に会するのは、毎年2月だけであるが、各個人がそれぞれ笛の練習をしている。

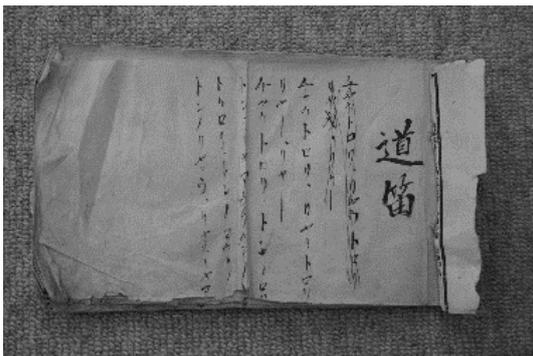


写真5 道笛の唱歌
(川浦公民館) 2024年4月20日撮影

(2) 川浦諏訪神社春季例大祭の準備

次に、川浦諏訪神社の春季例大祭と獅子舞の準備について述べていく。春期例大祭の前日の

4月20日の早朝、川浦公民館に祭り関係者が集まった。獅子舞奉納の準備や神社の飾り付けが行われた。このときの参加者は神社総代長、獅子組、川浦地区各班（1班から8班）の神社世話役人、計18人で準備を進めた。最初に、神社総代長の挨拶があって「皆で春季例大祭を盛り上げましょう！」との一通りの話があった。少子高齢化が進む倉渕地域では、祭りの参加者が子どもや若者よりも高齢者が多かったが、高齢者からトイレの距離について意見が出ており、トイレの重要性が理解できた。

準備では獅子組、川浦諏訪神社の神社総代長と神社世話役人の2組に分かれて行われたが、それぞれが担った準備内容の詳細をみてみたい。獅子組は獅子舞奉納で使用する諸道具の準備を行った。まず、腰につける太鼓を布巾で拭き、皮の表面や胴の汚れを落としていく。太鼓の革と紐、胴を分解し、半日公民館の外で日陰干しする（写真6）。



写真6 太鼓の日陰干し
(川浦公民館) 2024年4月20日撮影

太鼓を干すことで、革が張ってきれいな音が出るといわれている。また、獅子舞の衣装（唐草模様の下衣と上衣、手甲、脚絆など）もすべて日陰干しにする。

獅子舞奉納時は、草鞋を履いて舞う。地元の60代の男性が15年以上前から、手作りの草鞋を準備してくれている。かつて砂利道であった

ころは、草鞋の鼻緒がすぐに切れてしまい、一日に何足も草鞋を履きつぶした。獅子舞が舞う場をニワ（庭）と呼び、川諏訪神社本殿の右側につくる。まず、神社世話役人らが箒でニワを作る場を中心に掃き雑草を取ると、獅子組が庭に舞台を設置するため、大きな杭を地面に打って柱を作り、最後に簾をかけて完成した。

一方、神社総代長と神社世話役人は、本殿と境内の掃除と草むしり、境内の提灯飾り付け等を行った。これまで祭りの準備は獅子組だけで行い、通常は午後の神社境内の掃除だけに参加していたが、近年過疎化が進んだことから神社総代長や神社世話役人も加わった。

春季例大祭で川浦諏訪神社の氏子に分配されるのは、カサボコである。これは前述したように、白い紙を巻きつけた竹ひごに、短冊と花紙をつけたものである。短冊には倉渕の地名や山の名前のほか、例をみると「倉渕中学校」「ひらめき」「大谷翔平」「家内安全」「鼻曲山」「健康成就」等があった。今年は、神社総代長が川浦子ども育成会に短冊を書いてくれるよう、育成会の会長にお願いをし、川浦子ども育成会のスマートフォンコミュニケーションアプリのラインに、短冊募集のことを流してもらい、約100枚の短冊を集めることができた。このカサボコは神社からいただく魔除けで、分配するときは竹ひごを丸い輪のように折って氏子に渡される。いただいた人は神棚にあげ、人によっては家の中に魔が入るのを防ぐため、玄関口にカサボコを置く。かつては川浦地区全戸分の300本を川浦地区の各集落が持ち回りで作っていたが、現在は獅子組と神社世話役人が作っている。

まとめ

小稿では、高崎市倉渕町の川浦諏訪神社の獅子舞に焦点を当て、その練習方法と川浦諏訪神

社の春季例大祭の準備の現状をみてきた。

市指定重要無形民俗文化財川浦諏訪神社の獅子舞の練習方法は、舞手をしてきた先輩方から口伝で教わっていたが、近年ではDVDを活用するなど教え方も変わってきた。こうした変化は民俗文化財継承のために有用であると考えられる。

また、川浦諏訪神社の春季例大祭については、明治45年発刊の『烏渕村郷土誌』に記録された角力（相撲）は伝承されていないが、祭りに合わせて飾る提灯、傘鉾、山車は継続して伝承している。これらの発祥時の姿がどのようなものであったのか不明であるが、川浦諏訪神社の祭礼で氏子に分配される竹ひごのカサボコは、古くから根付いてきた習俗ではないだろうか。

今後も地域に伝わる習俗の聞き取りを進めるとともに、記録類や古写真の追及をすることで、地域の行事や祭礼にさらなる価値を与えることが出来るのではないだろうか。民俗学の調査が、地域に暮らす人びとに誇りと勇気を与えることになれば幸いである。

- 註1 福田アジオ 1992 『柳田國男の民俗学』 吉川弘文館、49頁
- 註2 笹原亮二 2001 「三匹獅子舞の分布」 『国立民族学博物館研究報告』 26号 国立民族学博物館
- 註3 本田安次 1996 「獅子舞考」 『本田安次著作集 日本の伝統芸能』 第一〇巻 錦正社、173～175頁
- 註4 新井南花 1955 「高崎市の郷土芸能概況」 『上毛民俗ノート』 9 上毛民俗学会
- 註5 群馬県教育文化事業団 2015 『ぐんまの獅子舞調査報告書』 群馬県教育文化事業団
- 註6 倉渕村誌編集委員会 1975 『倉渕村誌』 倉渕村、1038頁
- 註7 倉渕村誌編集委員会 1975 『倉渕村誌』 倉渕村、1038頁
- 註8 倉渕村誌編集委員会 1975 『倉渕村誌』 倉渕村、1101頁
- 註9 群馬県教育委員会編 1976 『倉渕村の民俗』（群馬県民俗調査報告書第十八集） 群馬県教育委員会事務局、202頁